

Mikimoto Gender Neutral Pearl Necklace

中野香織

ミキモトがコム デ ギャルソンと協働して、ジェンダーを問わないパールネックレスを創り上げた。宝飾界、モード界それぞれにおいて世界で最も知名度の高い日本ブランドによる、時代を先導するコンセプト〈ジェンダーニュートラル〉を掲げるジュエリーの誕生である。ミキモト真珠の正統派の美しさはそのまま活かされ、後ろの留め金や細部のアレンジにコム デ ギャルソンらしい遊び心が光る。

ジェンダーを問わないので、当然、男性が着用することも想定されている。

白くまろやかに輝く真珠は純潔や貞淑のイメージと結びつき、長い間、女性を象徴するジュエリーであるかのように思い込まれていた。しかし、歴史を振り返ると、そうでもないのである。インドのマハラジャには真珠の装飾が不可欠であった。16世紀、チューダー朝のイギリスでは国王ヘンリー8世が全身を真珠で飾り立てているし、宮廷人たちは片耳に真珠のイヤリングを飾っていた。探検家サー・ウォルター・ローリーも片耳に大きな真珠をつけて肖像画を描かせている。この時代には養殖真珠は存在しないので、危険と隣り合わせで海から採られ

た貴重な天然真珠である。ルネサンス時代の男性にとって、真珠は富の象徴であるとともに、「すばらしき新世界(Brave New World)」をめざす勇敢な人間であることの誇示でもあったのだ。この流行は17世紀まで続き、英国王チャールズ1世は常に片耳真珠をつけていた。同時代の女性も真珠をつけているので、ジェンダーによって着用を制限されたりはしない宝飾品だったことがわかる。

21世紀、ミキモト×コム デ ギャルソンのパールネックレスを筆頭に、ジェンダーニュートラルな真珠のアクセサリが世界で人気を博しているが、このトレンドの背景にあるのは、ジェンダーフルイド(ジェンダーは流動する)という考え方であろう。

男性としてふるまうか、女性としてふるまうか、そのどちらでもない性としてふるまうかは、時に応じて変わらう。そもそも、かけがえのない個性にジェンダーを問うことじたいが、ナンセンス。ジェンダーに紐づかない個々の内面を大切にすることから本物の多様性社会が生まれるのだ。そんな考え方である。

古い固定観念から自由になって、真の多様性社会の実現に貢献しようとする21世紀のルネサンス人は、真珠の優しくも強い光と相性がいい。

トレンドの背景にあるもう一つの要素として、サステナビリティという価値も無視できない。真珠は、次世代へと継承していける持続性がある。同時に、ファッショントレンドに大きく左右されないタイムレスな強さがある。さらにいえば汎用性まである。シンプルで完璧な白い真珠のネックレスは、ストリートでもカジュアルでもメンズスーツという正装でも、意外と何にでも合わせられる汎用性があることを、このコラボネックレスは証明してしまった。

過激で前衛的なデザインを施すこともできたであろうコム デ ギャルソンが、ミキモ

ト真珠の宝飾としての美しさをそのまま保持することを最大限に考慮したのは、時代の要請でもあるサステナビリティやタイムレスな価値を大切にしたいためでもあろう。

というわけで、ミキモト×コム デ ギャルソンによるパールネックレスは、ジェンダーをはじめとする「らしさ」にとらわれない「人」のピュアな本質を引き立てるとともに、持続可能な幸福と共にあろうとする新時代のラグジュアリーの象徴としても光り輝いているのである。

中野香織：服飾史家/昭和女子大学客員教授。

「日本経済新聞」「読売新聞」はじめ多くの媒体で連載記事を執筆するほか、講演・研修講師、企業のアドバイザーを務める。東京大学大学院修了後、ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授を務めた。著書「イノベーター」で読むアパレル全史(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル: 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)、ほか多数。

